

未来への勇気と想像力



核融合科学研究所長 吉田善章

新しい年の始まりにあたり、私たちの未来について思いを巡らせたいと思います。

世界中どこでも、年が改まる日は特別な感動をもって祝われます。私たちは、時間を直線的で連続な流れとして理解するように教化されているので、1月1日の0時に特別な物理的意味はないと了解しています。しかし一方で、この瞬間は一つの跳躍、色々なことが「改まる」ときとして、これを寿ぎます。元旦は「時」が再生する契機であり、この瞬間を人々が共有することを喜ぶ。時間の節目は広く空間を結びつけるモメントにもなるのです。親族や友人に思いを馳せる。報道は世界中の新年を伝えてくれる。苦難の中で新年を迎えている人たちもいる。未来を信じられる人も、そうでない人もいるでしょう。そういうことに思いを巡らせる。このような「年の改まり」とは、どういう意味を持つのでしょうか。

現代語では「新しい」と書いて「アタラシイ」と読みますが、これは「新 アラタ」と「可惜 アタラ」が中世に混交した結果であり、上代においては「アラタシイ」であったそうです。アラタは開墾したばかりの田を原義とし、そこから形容詞「新し アラタシ」や自動詞「改まる」他動詞「改む」が派生したとのこと（大野晋『古典基礎語辞典』角川学芸出版）。これらの言葉は全て古くから、概ね良い方向への変化を期待する意味で使われてきました。例えば「いつとても、ものあはれならぬをりはなき中に、今宵のあらたなる月の色には、げになほわが世のほかまでこそよろづ思い流されるれ」（源氏・鈴虫）では新しさに清らかさを重ねて愛でます。他方、「可惜 アタラ」の方は、「あたら若い時を無為に過ごす」といった使い方のように「そのものの価値（アタイ）相応に扱いたい」「値打ちがあるのに、その価値を認めないのは惜しい」と嘆息する気持ちを表す語です（大野晋、前掲）。アラタとアタラの二つが混交したのは、

音の並びが偶然に置換したという以上に、何か無意識が働いているに違いありません。フロイトによれば「言い間違い」は、夢と同じく、意識の下を見透す手掛かりなのです。「今」という時は、期待と惜しみの二つをアンビバレンツとして接合し、そこに混交・言い間違いが起きたのでしょう。「今宵のあらたなる月の色」は、色＝無常のアンビバレンツを象徴していると読むことができます。

さて、「新年」は「一年」を周期として巡ってきますが、このサイクルの起源は言うまでもなく季節の循環であり、それが文明社会における様々な活動に周期を刻印しています。農耕 agriculture（ager=田畑+cultura=耕作を語源とする）が文化 cultureの原初的な実現であったわけですが、農耕は季節のサイクルに関する経験知を必要とし、耕作に係わる共同事業が社会に時間管理を求めたに違いありません。年ごとに繰り返す安定的循環の一方で、私たちは、新年にあたって何か新しい展開を期待し、そのビジョンを持つとします。時間の直線とカレンダーのサイクルを接合させたとき、繰り返すものと変わるものに気づく、そこに「差異と反復」の基本的なテーマがあります。この両者を分節する神秘的な関係は算数の「割り算」によって象徴されます。例えば整数の割り算 $7/2=3+1/2$ において面白いのは、割り切れなかった「余り」として分数 $1/2$ が生成されることです。逆算すると、 $3 \times 2 + 1 = 7$ 、つまり7は2の「倍数」で与えられる部分6と「剰余」の1で構成されていることが分かります。3や5も同様に剰余1を持ちます。他方、6や8は2の倍数だけで成り立っています。このように2による割り算によって、整数全体は剰余が0となるグループ（いわゆる偶数）と1となるグループ（奇数）に「分類」されます。同様に整数nで割り算すると、剰余が0からn-1までのn種の分類ができます。割り算が持つこの「分類機能」は、分母におくもの（法 modulusと

言います)を大いに一般化・抽象化して現代数学の色々な理論で重要な役割を担います(例えば幾何学では図形を法にする「割り算」を定義します)。割り算こそ最も神秘的な計算だといっても過言でないでしょう。これを用いて直線的時間とサイクルの時間の関係を整理できます。サイクルを通じて起こる変化を「元に戻るもの」で割り算したとき(除したとき)残るもの(剰余)が本質的な変化であり、それが直線的な時間の上に新たな展開を紡いでいきます。新しい年の初めにおいて、一年前から変化したこと、跳躍、それが未来を真に新しいものにするのです。

私たちの未来は、あざやかで幸福であることを願うばかりです。しかし現実には、世界は様々な不確実性と苦悩で満ち溢れています。紛争地帯の人々の消息には胸を蓋がれます。豊かな国でも反知性主義がはびこり、科学は金儲けの道具、他を圧倒する力だと考える人たちが増えています。不正が横行しても、異常な格差が生まれていても無関心な市民。権力で人を動かそうとする輩が支配するところには、常に虚構と疎外が生じます。環境問題に抗議の声をあげる若者たち、それを「頼もしい」などとコメントしている呑気なニュースキャスター。怒れる少女がヒロインになること自体が世界の重苦しさを象徴しています。「小さな

子らよ 牧場で歌え 笑い声で風に穴をあけながら」(訳:小海永二)軽やかに満ちたこの美しい詩を書いて10年ほど、ロルカはスペイン内戦に巻き込まれ、38歳で命を落とします。愚行ばかりが繰り返されてきた歴史。積み上げてきたものが一挙に破壊されるようなサイクルを止めなくてはなりません。

「新しい年」は、必ずしも単純に喜んでいて良いものでないことを縷々述べてきましたが、やはり希望を持って前へ進むことが大事です。私たちの背中を押してくれるような言葉を記して、新年の言祝ぎにしたいと思います。

怖がらなければ人生は素晴らしいものだよ。ただ必要なものは、勇気、想像力、そしていくらかのお金。

Yes, life is wonderful, if you're not afraid of it. All it needs is courage, Imagination, And some money.

映画「ライムライト」(1952)で喜劇役者カルヴェロ(チャップリン)が踊り子テリー(クレア・ブルーム)を励ます言葉。核融合研の未来に取り組む所内外の皆さんのために、友人がこの言葉を私に伝えてくれました。胸を張って「人間精神の名誉 l'honneur de l'esprit humain」のために働いたと言えるような、この一年でありますように。

